松　山　大　学　論　集
第 34 巻 第 5 号 抜 刷
２０２２ 年 12 月 発 行

# ラフカディオ・ハーンの「夏の日の夢」における避難（リトリート）

## ―― 海，空，青，「浦島」伝説，永遠に女性なるもの ――

矢　次　　綾

# ラフカディオ・ハーンの「夏の日の夢」における避難（リトリート）

## ―― 海，空，青，「浦島」伝説，永遠に女性なるもの ――

矢　次　　綾

## Ⅰ　序

『東の国から』（*Out of the East : Review and Studies in New Japan*, 1895）冒頭に収録されている「夏の日の夢」（“The Dream of a Summer Day”）は，引用文献に挙げている版で，わずか 27 ページの小品ながら，作者ラフカディオ・ハーン（Patrick Lafcadio Hearn, aka 小泉八雲, 1850-1904）の 19 世紀末の日本に対する姿勢，再話文学者そしてフォークロリストとしての側面，深層心理への関心などが表出する奥行のある作品である。内容について手短に言えば，ハーンは，熊本に在住していた 1893 年の夏，実際に行った長崎方面への旅について，虚構を織り交ぜながら記述すると共に[1]，自分自身の深層に至る心の軌跡を描いている。5 部構成の第 2 部において，ハーンは「浦島太郎」として一般に知られる「浦島」伝説を再話しており[2]，この箇所を取り上げて，再話文学者としてのハーンの特徴や，ハーンが日本のお伽話の中でも「浦島」伝説を好んだ背景などについて分析することが可能である[3]。ただし，物理的な旅と，それに伴う心理的な旅という一連の流れの中で，ハーンが「浦島」伝説を再話していることに本稿では留意したい。そうすることにより，ハーンがこの伝説をどのように捉え，どのような観点から再話しているかという点だけではなく，自分の心の深層に眠るものに対してどのような思いを抱いているか，自分がそれに向き合う様子をどのように描出しているかについても，分析できると考えられ

るからである。

## Ⅱ　現実からの避難（リトリート）

「夏の日の夢」の大枠は，冒頭で提示されているように，西洋化した19世紀末の日本からの避難である。この点は，ハーンが，「開港地（Open Ports）の一つ」すなわち長崎の「『近代設備』を備えたヨーロッパ風ホテル」から逃げ出して，たどり着いた港町，三角にある旅館「浦島屋」を自分にとっての「楽園（paradise）」と呼び，「19世紀のあらゆる悲しみから救出されたような」気持ちになった（1）と叙述していることによって匂わされている[4]。「浦島屋」はハーンが宿泊した施設名だが，ハーンは，実際には「ヨーロッパ風」だった「浦島屋」を，作品内で和風旅館に変更している[5]。その理由が，19世紀末という現在から，失われつつある古きよき日本への逃避という枠組みを作るためであることは明らかだろう。「浦島屋」という宿名が「浦島」伝説の再話と関連していることもまた明らかだが，ハーンには，古きよき日本とフォークロアの世界を関連づける傾向がある。この傾向は，例えば，『見知らぬ日本の面影』（*Glimpse of Unfamiliar Japan*，1894）に収録された「東洋の第一日目」（“My First Day in the Orient”）第3節の最後で，自分が憧れていた古きよき日本を「かつて夢に見た妖精の国（the old dream of a World of Elves）」（6）に喩えることによって裏づけられている。「夏の日の夢」に書き込んだのと同種の移動を，ハーンはその3年前の1890年，横浜の居留地から，出雲あるいは松江への移動においても経験している。池田の言葉を借りるなら，当時の松江は，ハーンにとって「西洋文明がその世界においてとうに駆逐したはずの異端の神々が住み給う聖なる都」（42）であり，この移動はハーンにとって，明治から古代への時間旅行に等しく，しかも，アメリカ在住時に読んだ，チェンバレン（Basil Hall Chamberlain, 1850-1935）訳の『古事記』（*KO-JI-KI or Records of Ancient Matters*，1882）に登場する神々が息づく世界への心躍る移動だったのである[6]。

さらにその数十年前，子供時代を過ごしたアイルランドでも，ハーンは類似

した移動を経験している。大叔母サラ・ブレナン（Sarah Brenane）の家があるダブリンから，ウォーターフォード州トラモア（Tramore）の海沿いにある別荘への移動である。ハーンはギリシャ人の実母ローザ（Rosa Antonia Cassimati）が精神を病み，幼いハーンを残して故郷のイオニア諸島に去り[7]，父（Charles Bush Hearn）が再婚してインドに赴任した後[8]，ブレナン家の跡継ぎのカトリック教徒として育てられた（Stevenson 8, 12, 14）が，そこでの生活は抑圧に満ちていたのである。ハーンはエッセイ「私の守護天使」（“My Guardian Angel”）において，6歳の頃の自分の様子を次のように記している。

> I then believed in ghosts and in goblins, ― because I saw them, both by day and by night. Before going to sleep I would always cover up my head to prevent them from looking at me ; and I used to scream when I felt them pulling at the bedclothes. And I could not understand why I had been forbidden to talk about these experiences. （*Life and Letters*, vol. 1, 16）

早いうちに暗闇に慣れさせておく方がよいというブレナンの考えにより，5歳の頃から一人で寝室を使っていたハーン（Stevenson 13）は，寝室が何ものかに取り憑かれていると信じ込んでいたが，それについて語ることは禁じられていた。彼の信じた幽霊や悪鬼が，キリスト教以前の異教の信仰に基づいていたからであろう。だからと言ってカトリックを理解し信仰することもできない幼いハーンは，ブレナンの被後見人で敬虔なカトリック教徒の従姉ジェイン（Cousin Jane）から，不信神者が地獄の業火で焼かれることなどについて語り聞かされ，カトリックに対する恐怖心を植え付けられてもいたのである（“My Guardian Angel” 20 ; Stevenson 14-15, Murray xiv）[9]。

ダブリンの家から離れ，乳母のキャサリン・コステロ（Catherine Costello）と一緒にトラモアの海辺で過ごす夏は，ハーンにとって息が詰まる現実からの避難だった。この経験を，エリザベス・スティーヴンスンはハーン伝の中で次

のように述べている。

> [A]s a child, he was sometimes sent with the maid, Kate, [to Tramore and Bangor]. Her company — away from Aunt Sarah — meant fairy stories and folk sayings, a preposterous thick medium of superstition and ritual, all forbidden at home, but richly indulged in once well away from the house in Rathmines. The child, listening to these Irish sayings and stories, had a mind ready for all wonders, queernesses, all the exultations of the impossible. (16)

ケイト（Kate）すなわちコステロはケルトの文化が色濃く残るコンノート地方の出身であり（平川 188, Murray xv），キリスト教以前のケルトの伝統を踏襲する民話，儀礼，迷信についてハーンに語ってくれた。それはハーンにとって，驚嘆と歓喜に満ちた世界を経験するに等しく，トラモアへの移動は，物理的な移動だっただけではなく，ダブリンでは禁じられたフォークロア，すなわちキリスト教以前のケルトの世界への移動だったのである。なお，コステロは，上の引用には「女中（maid）」と記されているが，乳母と呼ばれることが多い。日本語と英語が併記された，小泉凡監修『開かれた精神』でも，“nanny” の訳語として「乳母」が採用されている。実際は「子守り」だったと推測されるが，慣例に倣い，本稿でも「乳母」と呼んでいる。

なお，コステロの語り聞かせにより，ハーンのケルティック・コンシャスネスが芽生えた可能性について，本稿では留意せず，ハーンの大まかな傾向の原体験になったであろう点にのみ，留意する。[10] 西成彦が鶴岡真弓との対談の中で，コステロがハーンに与えたものを「乳母的な教育」と呼び，ハーンの母ローザにも言及しながら次のように説明している点である。

> 最初の二年間は母親がまさに実母もかねた乳母としておっぱいをやっていたわけで，最初の「教育」はレフカダ島の口承文化であったと思います。

そして，二歳でダブリンに移り，母と別離してからは，その上にアイルランドがかった「乳母的なもの」が接ぎ木されたのだと思うわけです。公教育で学ぶ以外のフォークロア・レベルの躾という形でね。ただ，それを彼がケルティック・コンシャスネスという形で意識化したかどうかとなると疑問なわけです。（『ケルトの魂』207）

なお，コステロが語った民話の中に，ケルトの伝説「青春の島のオシーン」（“Oisin in the Land of Youth, ” aka “Oisín in Tir na nÓg”）が含まれていた可能性が高い。この伝説と「浦島」伝説には共通する要素が多く，その関連性について，土居光知を始め，多くの研究者が注目しているが，[11] この伝説に限らず，特定のケルトの伝承が「浦島」伝説へのハーンの興味を喚起した可能性についても，本稿では留意しない。その他の伝承及び作品も合わせて吟味しながら，別途議論が必要だと考えられるからである。要するに，西の言葉を借りるなら，「大叔母のわずかな不在の時間に起こる」コステロとのやり取りにはハーンの「感性に訴えるもの」があり，フォークロアへの興味が喚起されたことや，女性の声に耳を傾けるという生涯を貫く習慣の素地が培われたことにのみ，留意する。実際，その後のハーンは，シンシナティで，内縁関係にあったマティ（Alethea “Mattie” Foley, 1854-1913）や，[12] 妻，小泉節子（1868-1932）の語る伝承に耳を傾け，そうすることを，作家として，再話文学者としての活動の源泉の一つにしている。

「夏の日の夢」の枠内でも，ハーンは女性の声に耳を傾けている。「浦島屋」の若女将の声，再話した「浦島」伝説に登場する「竜王（the Dragon King of the Sea）の娘」の声，「太陽や月が今よりも大きく，そして，強く輝いていた場所と魔法のような時間の記憶」（20）の中にいる女性の声である。どの声の背景にも，青い海と空があることが叙述され，彼女たちの声が重なり合い，連動し合っていることが示唆されている。青い海と空は，コステロによってケルトの伝承を語り聞かせられたトラモアでも，実母と過ごしたレフカダ島でも，背景

を成していたはずである。この点を考慮するなら，「夏の日の夢」における避難地は，トラモアやレフカダ島と地続きだと言える。そのすべてが，西洋化された日本に限定されない，「19世紀のあらゆる悲しみ」からの避難地なのである。この点に留意しながら，「夏の日の夢」における避難地でハーンが何を経験したのか，それをどのように描出しているかについて，次節以降で吟味する。その際，ハーンによる再話版「浦島」伝説を同時進行で分析する。

## Ⅲ　ハーンと浦島

ハーン版「浦島」の特徴の一つとして，西成彦が論じているように，「浦島」伝説に史実としての枠を設定していることがある（『耳の悦楽』68-69）。すなわち，ハーンは「1416年前」（4）の物語として再話を始め，語り終えた後に「歴代天皇の公的な年代記」すなわち『日本書紀』（720）に，「雄略天皇22年，丹後国余社郡水之江の浦島子，漁舟に乗りて蓬萊（Elysium）に赴く」と記されていることに言及し，[13] さらに続けて次のように述べている。

> After this there is no more news of Urashima during the reigns of thirty-one emperors and empresses — that is, from the fifth until the ninth century. And then the annals announce that "in the second year of Tenchiyō, in the reign of the Mikado Go-Junwa, the boy Urashima returned, and presently departed again, none knew whither."　(12)

雄略22年は西暦478年であり，再話を行っている1893年から，ほぼ「1416年前」にあたる。ハーンは，浦島が「竜王の娘」に誘われて赴いた場所を，浦島の言動について語っているときは，蓬萊ではなく「常夏の島（the island where summer never dies）」と呼んでいるが，これらは同一の場所である。その証拠に，「蓬萊」（"Hōrai," *Kwaidan : Stories and Studies of Strange Things*, 1904）の中で，蓬萊を「死も苦しみもなく，冬もない」（190）とハーンは説明し，さら

に，蓬莱には「空と海だけ ―― 一面に広がる淡青色」（189）があると書き添えている。それが，前節の最終段落で述べたように，避難（リトリート）地の特徴であることは繰り返すまでもないだろう。ハーン版「浦島」の史実性に話を戻すなら，浦島が「常夏の島」で過ごした年数は 400 年以上であり（*Out of the East* 10），これは，『日本書紀』の中に，浦島の情報がなく，不在だったと記されている「5 世紀から 9 世紀まで」と合致する。このように，「浦島」伝説を史実として扱うことにより，ハーンは，19 世紀末の日本の現実から避難して「浦島屋」を訪れた自分と，雄略 22 年という現実から離れて「常夏の島」に行った浦島を重ね合わせながら再話していることがわかる。

一方でハーンは，浦島が日本人の同情の対象であり，浦島明神に祀られていることに対し，西洋人の立場から疑問を呈している（18-19）。この点について分析する前に，ハーン版「浦島」の概要を確認しよう。釣り糸にかかった亀を逃がした浦島が，[14] 海に浮かべた舟の上でうつらうつらしていると，「竜王の娘」に優しく声をかけられる。「彼女はどんな人間よりも美しく，彼女を愛さずにはいられなかった」（5 - 6）浦島は，誘われるままに竜王の城へ赴く。そこで浦島は「竜王の娘」と結ばれ，幸福な日々を過ごすが，日本にいる両親のことが気にかかり（7），すぐに戻ると妻に約束して日本に戻る（8 - 9）。ところが，日本では 400 年以上の年月が経過しており，自分が「奇妙な幻想（some strange illusion）」（10-11）の犠牲になっているという思いに駆られた浦島は，「幻想」を引き起こす要因が見つかるかもしれないと思い，妻から手渡され，開けてはいけないと念を押されていた小箱を開けてしまう。すると箱の中から「夏の雲のような白くて冷たい霊的な蒸気」（11）が出てきて，浦島は 400 年分の冬の重さによって押しつぶされてしまう。ハーンは浦島の最期を，「神（the gods）」の「惑わし（bewilderment）」に遭い（18），「神慮（the purpose of the gods）」を疑った結果，小箱を開け，「何の苦労もせずに亡くなった」と言い換え，「西洋人が神に背けば，最上級の悲しみをその高さにおいても，幅においても，深さにおいても生きながらえて学ばなければならない」と断じている。ただし，

その直後にハーンは口調を和らげ，浦島への同情とは実際には，「(伝説を知る人々の）自己憐憫の情（self-pity)」であり，「浦島」伝説は「無数の人々の魂の伝説（the legend of a myriad souls)」なのだろうと述べる。そして，「青い光と柔らかい風の時期になると，そういった自己憐憫の情が，過去の過ち(an old reproach）と同様に心に浮かんでくるのだ」と付け加えている（19)。

ハーンが自分と浦島を重ね合わせていることを考慮するなら，浦島の最期についてのハーンの分析は，自分自身についての分析に等しい。分析は，ハーンが再話を終え，有明海沿いの道を人力車でたどるなどした後に行われるが，ハーンはなぜこのような分析をするに至ったのだろうか。この点について解明する鍵になるのは，ハーンが「竜王の娘」を「神」と呼び，自分のところに戻りたいなら箱を開けてはいけないという彼女の指示を「神慮」と呼んでいることであろう。すなわち，浦島を魅了する一方，破滅を引き起こす危険性を包含する小箱を浦島に手渡した「竜王の娘」を，ハーンが「永遠に女性なるもの(Eternal Feminine)」と見なしていることである。この点を裏づけるかのように，ハーンは，エッセイ「永遠に女性なるものについて」(“Of the Eternal Feminine,” *Out of the East*）の中で，そのような女性を「男を魅了する危険な美女（a dangerous beauty, a charmer of men)」(92）と呼び，「手の届かないもの，理解し難いもの，神聖なもの（the Unattainable, the Incomprehensible, the Divine)」(104）と言い換えている。東京帝国大学での講義の一つ「克服し難い困難」（“The Insuperable Difficulty”）の中では，女性を「一個の神（a god)」(*Interpretations of Literature* 3）と実際に呼んでいる。

ハーンが「浦島」伝説を再話する，そもそものきっかけは，「浦島屋」で若女将に遭い，「竜王の娘」を連想したことにある。この点は，女将のことをハーンが「妖精の女将（The fairy mistress)」(12）と呼んでいることによって裏づけられており，その「妖精」としての側面は，自分が魅了される過程を描く際に，ハーンが彼女を虫に喩えていることによって示唆されている。これを，ハーンが「永遠に女性なるものについて」で述べた，女性美と自然美は共通す

るという見方（*Out of the East* 112）の傍証と見なすことも可能であろう。すなわち，ハーンは，自分の耳に入ってきた女将の声を「風鈴の音」（2）と表現しながら，鈴虫であるかのような印象を持ったことを示唆し，目に入った女将の見目麗しい姿から，歌川国貞（1786-1865）の絵筆による蚊や蝶の化身を想起している。そして，女将との短いやり取りを経て一人になった自分が，「心震える霊的な蜘蛛の網（the thrilling of a ghostly web）のような恍惚感（enchantment）で全身を包まれているような気分になっていた」（3）と叙述することにより，ハーンは女将に蜘蛛としての側面があることを匂わせている。「浦島屋」を出立したハーンは，海沿いの道を人力車に揺られながら，自分が浦島の平底舟に乗っているような気分になる（13-14）。ハーンは，その際の自分の精神状態を「魂という蚋（ぶよ）（The gnat of the soul）」（14）と呼ぶことにより，虫というイメジャリが頭に残っている，すなわち，女将に与えられた「恍惚感」が続いていることだけではなく，荘周（BC 369-268, aka 荘子）が「胡蝶の夢」で表現したように，自分と他者の区別がつかない下意識（subconsciousness）の状態に自分が陥っていることを示している。[15] ハーンは「胡蝶の夢」に興味を持っており，その証拠に，エッセイ「蝶」（“Butterflies,” *Kwaidan*）の第1節において，荘周が夢の中で「自分の魂を蝶に同化させ，蝶のあらゆる感覚（sensations）を味わった」ことに言及している（198）。

下意識の状態に陥ることによってハーンが思い出したのは，「太陽や月が今よりも大きく，そして，強く輝いていた場所と魔法のような時間の記憶」（20）である。その場所について，ハーンは次のように描写している。

> Whether it was of this life or of some life before I cannot tell. But I know the sky was very much more blue, and nearer to the world, — almost as it seems to become above the masts of a steamer steaming into equatorial summer. The sea was alive, and used to talk, — and the Wind made me cry out for joy when it touched me.

この地は明らかに南国であり，「赤道の夏」に向かう「汽船」と同様に，ハーンも南を志向していることがわかる。その特徴としてハーンが付け加える，「一日の長さが今よりもずっと長く，新たな驚異や喜びが見つかる」(20-21) ことは，子供時代の特徴であり，人がハーンを「楽しく幸せにすることばかり考えている」のは，そこでのハーンが子供だからである。要するに，これは，ダブリンという北方の都市に移住する以前，ヨーロッパの南部，レフカダ島で過ごしていた頃の記憶であり，「私が頭の先から足の先まで嬉しさでぞくぞくするような話（stories that made me tingle from head to food with pleasure)」(21) を聞かせてくれた女性は，仙北谷晃一の言葉を借りるなら，「あんなに悲しい別れ方をした彼の母ローザ・カシマチ」(59-60) に他ならない。母が歌ってくれるのが「眠気をもよおさせる不思議な歌」(21) である理由は，母が英語ではなく，イオニア諸島で話されているギリシャ語やイタリア語で歌っていたためであろう。英語話者になってしまった大人のハーンには，これらの言語は聞き慣れない言葉なのである。[16] この「記憶」が，19世紀末の日本からの避難（リトリート）の到達点だった。ハーンがたどった心の旅は，1893年現在の自分自身の根本にある原体験 —— 母ローザから伝承民話を語り聞かされていた頃の体験 —— を再発見する旅だったのである。

ハーンは「浦島」伝説について分析の中で，青い空や海が象徴する季節，すなわち「青い光と柔らかい風の時期」は，「浦島」伝説が呼び起こす想念，すなわち「自己憐憫の情」が，「身に覚えのある過失（an old reproach)」と共に浮かんでくる時期だと述べていた (19) が，青い海と空，「喜びの叫びをあげたくなるような風」(20) がある「記憶」の中で，彼は自分自身の「過失」を思い出している。その一つが，自分が思いやりを素直に受け容れず，「神々しい（divine)」と形容される母を苦しめていたことである。もう一つは，母との別れに関連している。

At last there came a parting day ; and she wept, and told me of a charm she

had given that I must never, never lose, because it would keep me young, and give me power to return. But I never returned. And the years went ; and one day I knew that I had lost the charm, and had become ridiculously old. （21）

ハーンは，母が「神慮」の証として渡してくれた「お守り」を失くしてしまった，すなわち，自分が浦島と同じ過ちを犯していることを思い出したのである。「お守り」を失くしたことに気づくと同時に，「途方もなく老いてしまった」ことを自覚するハーンは，小箱を開けてしまった瞬間に，「自分で自分の幸福を壊してしまったことと，愛する『竜王の娘』のもとに二度と戻れないこと」を理解し，400 年以上の年月を一瞬のうちに経験した浦島（11）そのものである。要するに，「浦島」伝説という「無数の人々の魂の伝説」（19）は，ハーン自身の魂の伝説でもあったのである。

## Ⅳ　結び —— 新たな避難（リトリート）

前節の最後に述べた自覚に到達した後の「夏の日の夢」第 5 部で，ハーンは長浜村（the Village of the Long Beach, [22]）にいる。そこで赤ん坊の声に耳を傾け，その赤ん坊を背負った若い男を眺めているうちに，「若返りの泉（the Fountain of Youth）」の伝説を思い出す（22）。概要は以下である。「泉」の水を飲んで若返った男が年老いた妻にその水を飲むよう勧めると，妻は水を飲み過ぎてしまい，娘時代を通り越して，言葉を話すことさえできない幼年時代に戻ってしまう（23-26）。ハーンは「浦島について夢想した後だと，この物語の持つ教訓（moral）が，以前に思い出したときほどしっくりこない」（26）とコメントしているが，以前に見出した「教訓」は，水を飲み過ぎてしまった妻の貪欲さを諌めるものだったであろう。しかしながら，浦島について「夢想」し，浦島同様に自分も「自分で自分の幸福を壊してしまった」（11）ことを自覚したハーンの印象に残り，憐憫の情を感じさせたのは，夫の言動だったはずである。なぜなら，「美しく，ほっそりした娘」（25）に戻ることを期待して妻に「泉」

の水を飲むように勧めた夫は，妻が水を飲み過ぎる可能性に思いを至らせることができず，夫婦生活を結果的に終わらせてしまったからである。妻を我が子と言える年齢にまで若返らせてしまった夫と，「記憶」の中の母の年齢を遥かに超えるくらい「老いてしまった」ハーンの姿は重なっている。

ハーンが「夏の日の夢」最終部で，この伝説を再話した理由は何だろうか。ハーン自身が作中でコメントしているように，何かを思い出すことによって心持ちが変わり，ものの見え方もまた変化する可能性がある。この点を示唆するためではないだろうか。換言すれば，「浦島」伝説や，母と一緒だった遠い日の記憶を呼び起こしたハーンは，思い出すことが必ずしもよい効果をもたらすとは限らないことに気づいたはずである。「何の苦労もせずに亡くなった」浦島とは異なり，その後も生き続けるハーンは，彼の言う西洋人の見地に立てば，母の「神慮」の証であるお守りを失くしたことについての「最上級の悲しみをその高さにおいても，幅においても，深さにおいても生きながらえて」(19) 学ばなければならない。「若返りの泉」の伝説を思い出した長浜村で人力車を乗り継ぎ，19世紀末の日本を象徴する都市，熊本に戻り，避難（リトリート）を終えても，そのような悲しみを抱え続けなければならないのである。

もっとも，ハーンはその悲しみから避難することにしたようである。車夫が交代することになり，熊本までハーンを連れていく予定だった車屋が，長浜村までの車代55銭のみを請求したとき，ハーンは，「浦島屋」の若女将の「車屋には75銭だけ払ってください」(14) という言葉にしたがい，75銭を支払う (27)。その理由をハーンは「神様（the gods）が怖いから」と説明しているが，実際には，女将の「神慮」に応えることによって，「神様」とのやり取りにけりを付け，母の「神慮」について再度忘却するためであろう。要するに，ハーンは現実に戻るために，過去の記憶から避難することにしたのである。

**注**

1）梅本順子は，1893年7月22日付けのチェンバレン宛の書簡を基に，ハーンの実際の旅について次のように説明している。

> 七月二〇日に熊本を出立して，百貫，三角を経て船で長崎に渡り，二一日未明の三時過ぎに長崎の洋式ホテルである，ベルビュー・ホテルに到着している。しかし，居心地の悪さから二一日中には熊本への帰路に着き，途中三角のホテル「浦島屋」に立ち寄った。(135)

梅本は，「夏の日の夢」を読むことで「克明に旅の軌跡をたどることができる」と述べると同時に，作中で和式旅館として設定されている「浦島屋」が実際には「洋式ホテル」であることや，「車屋に払った運賃等」も実際とは異なる点があることも，同ページに記している。チェンバレン宛のこの書簡の全文は，仙北谷晃一が和訳で引用している（42-47）。

2）現在，「浦島太郎」として知られている物語は，巌谷小波の『日本昔噺』第18編「浦島太郎」(1896）を基に，明治時代に確立した国定教科書に掲載された物語である。この点については，三舟のpp. 190-93を参照。文部省唱歌の「浦島太郎」も『日本昔噺』に基づいている（三舟194-95)。なお，原話は，『日本書紀』(720)，『万葉集』(759-80頃に成立)，『丹後国風土記』（8世紀？）にさかのぼる浦島子の伝説だと見なされており，物語としての原形は『御伽草紙』にあると考えられている。ただし，三舟によると，「『御伽草紙』に先行する浦島太郎の物語として，日本文芸協会蔵の古絵巻「うらしま下」」があり，その上巻は散失しているものの，成立時期は室町時代末期と見なされている（91)。本稿では，『日本書紀』の中で浦島子が478（雄略天皇22）年に竜宮城に向かったと記されていることに留意しながらハーンが再話していることを鑑み，「浦島太郎」ではなく，「浦島」伝説という用語を使用する。なお，「浦島伝説という呼称」について，林昇平が著書の「序章」で考察している（6 - 7）。

3）ハーンが「浦島」伝説を好んだ証拠に，妻の小泉節子が「思い出の記」の中で，ハーンは「日本のお伽噺のうちでは『浦島太郎』が一番好きでございました」と記している。それに続けて，節子は次のように述べている。

> ただ浦島という名を聞いただけでも，「ああ，浦島」と申して喜んでいました。よく廊下の端近くへ出まして『春の日の霞める空に，すみの江の…』と節をつけて面白そうに毎度歌いました。よく暗誦していました。(34)

ハーンが暗誦していたのは，明らかに『万葉集』巻九に収録された高橋虫麿（生没年不詳）の歌である。「思い出の記」で節子が引用している「春の日の霞める空に」の後には「墨吉の岸に出でゐて」に始まる3行が入るが，節子の記憶の中のハーンが「廊下の端近くへ」

出ていたのは，「すみの江の岸」に出る様子を表現するためであろう。

4）熊本在住中のハーンがこの旅をしていることを考慮するなら，「19世紀のあらゆる悲しみ」として，「欧化主義や富国強兵に突き進む〈新日本〉」（池田 58）に，西南戦争（1877）を経て「焼け野原で，神社仏閣が無残な姿をさらしていて，町が焦土化」（65）した熊本で直面させられたことが大きいだろう。

5）注1を参照。

6）小泉凡監修『開かれた精神』によると，ハーンは，来日直前のニューヨークでチェンバレン訳の『古事記』を初めて読み，「大きな関心を寄せ，同書で日本文化の古層が残る『出雲』という地の存在と出雲神話の面白さ」を知った（52）。

7）精神を病んだローザは，後に再婚したものの，59歳で亡くなるまで，（イオニア諸島内）ケルキラ島の北部コルフの精神病院で過ごしている（牧野『異文化体験』9）。ただし発症時期がダブリン滞在時か，帰国後かについては諸説ある。

8）ハーンの父親は，マレーによるとイギリス陸軍の “officer-surgeon”（日本語では，軍医と置き換えられる場合と，軍医補と置き換えられる場合がある）であり，イギリス帝国領内を頻繁に異動していた。ハーンの両親は，イオニア諸島で1840年代の終わりに出会っているが，その歴史的背景として，1815年，イオニア諸島合衆国（United States of the Ionian Islands）がイギリスの保護国として樹立されていたことがある（Murray xi-xii）。

9）ブレナンはハーンの父方の祖母エリザベスの家系，ホームズ（Holmes）家の出身であり，アイルランドの支配階級（アセンダンシー）らしく，もとはプロテスタントだが，夫に倣ってカトリックに改宗していた。もっともマレーによれば，ブレナンのカトリックとしての信仰心は形式的なものに過ぎず，カトリックに対する反発心と嫌悪感を抱かせたのは，ブレナンの被後見人の従姉ジェインである（Murray xiii-xiv）。なお，ジェインは実際にはハーンの従姉ではないが，“Cousin Jane” と呼ばれていた（Stevenson 14）。

10）マレーは，ハーン滞在時期のダブリンで，中流階級がアイルランドの田園地域で収集された民話への興味を高めつつあったことを指摘し，ハーンがこの潮流から直接的な影響を受けたと述べている。その証拠として，ハーンが「コンノート地方出身の乳母（nurse）が妖精譚や怪談を自分に語ってくれました。だから，当然私はアイルランド的なものを愛し，アイルランド的なことを行って然るべきなのです」と記した，イェイツ（William Butler Yeats, 1865-1939）宛の1901年の書簡を引用している（Murray xv）。しかしながら，ハーン自身がそのように記していても，どの段階で，また，どのような理由で特定の意識を芽生えさせたかについては，その他の証拠も加味した議論が必要であろう。ケルト復興運動に先立つダブリンの中流階級の傾向と，コンノート地方出身の乳母のハーンに対する語り聞かせの関わりについても同様である。

11）「青春の島オシーン」には「浦島」伝説と共通する要素が目立つ。代表例として，土居光知が『神話・伝説の研究』第1章「神話・伝説の伝播と流転」（1973）の中で，「うた人トマスのうた」（“Thomas the Rhymer” スコットランドのボーダーズ地方［the Scottish

Borders, aka Mairches, Crìochan na h-Alba］に伝わるサー・トマス・デ・エルシルドゥン［Sir Thomas de Ercildoun, aka Thomas the Rhymer, Thomas Learmont or True Thomas］の伝説）も合わせて類似点を分析し，中央アジアで生まれた「楽園のものがたり」が「絹の道」などを通って東西に伝播した証拠と見なしている（70-89）。

12）ハーンは，アフリカ系の血を引くマティと1874年に挙式しているが，異人種間での婚姻を禁じたオハイオ州法に抵触したため，ジャーナリストとして就職していたシンシナティ・エンクワイアラー社を解雇されている（『開かれた精神』46）。正式な結婚として公に認められていなかったという理由で，本稿では「内縁関係」と表現している。

13）浦島子の伝説が「浦島太郎」の原話だと見なされていることについては，注2を参照。

14）「浦島太郎」において，同名の主人公は親切心から亀を助けるパターンが多いが，西が『耳の悦楽』（11）で留意しているように，ハーン版浦島は「竜王にとって聖なる生き物である亀を殺すのは悪いことだ」というアニミズム的な道徳心から亀を逃がしている（*Out of the East* 11）。なお，「夏の日の夢」第2部の冒頭で，ハーンはアストン（William George Aston, 1841-1911）や，チェンバレンが「浦島」伝説を英訳していることについて述べ（4），チェンバレンの2種類の英訳の中でも，子供向けの散文訳 “The Fisher-Boy Urashima”（Hasegawa’s Japanese Fairy Tale Series No. 8, 1886）に，「夏の日の夢」における再話の途中で（5），そして，エッセイ「日本の庭にて」（“In a Japanese Garden,” *Glimpses* 300）の注でも言及している。チェンバレンの “The Fisher-Boy Urashima” は，「縮緬本」と呼ばれているが，林昇平によると，縮緬本は「縮緬状に加工された紙で作られた書物の謂いであるが，一般には長谷川武次郎の弘文社において出版された錦絵の挿絵をもつ一群の書物を指すことが多い」（334）。この点に限らず，チェンバレン訳については，林の「チェンバレン訳・所謂縮緬本『浦島』覚書」（334-62）が詳しい。その中に，［参考図版］として，チェンバレン訳の「縮緬本『浦島』」が収録されている。ただし，ハーンはこの版ではなく，チェンバレン訳『万葉集』における該当箇所に基づいて「浦島」伝説を再話していることを，牧野陽子が『〈時〉をつなぐ言葉』の中で論証している（261-99）。

15）「胡蝶の夢」については，森三樹三郎訳『荘子』Ⅰの pp. 73-74 を参照。

16）ハーンはチェンバレン宛の1895年3月の書簡の中で，“my child-tongue was Italian. I spoke Romaic and Italian by turns”（*Life and Letters* vol. 2, 329）と述べており，ダブリンで英語話者になる前，ギリシャ人の母親と近代ギリシャ語（Romaic）とイタリア語を使用していたと言明している。

## 引　用　文　献

Hearn, Lafcadio. *Glimpses of Unfamiliar Japan*. Ed. Donald Ritchie. Tuttle, 2009.

————. *Kwaidan*. *Stories and Studies of Strange Things*. Bernhard Tauchnitz, 1907.

————. *Interpretations of Literature*. Vol. 1. Ed. John Erskine. Kennikat, 1915.

————. *The Life and Letters of Lafcadio Hearn*, vol. 1. Ed. Elizabeth Bisland. Archibald

Constable, 1907.
————. *Life and Letters of Lafcadio Hearn including the Japanese Letters*. vol. 2. Ed. Elizabeth Bisland. Houghton Mifflin, 1923.
————. *Out of the East : Reveries and Studies in New Japan*. Kegan Paul, 1903.
Murray, Paul. "Introduction." *Japanese Ghost Stories*. Ed. Paul Murray. Penguin, 2019. pp. xi-xxxiv.
Stevenson, Elizabeth. *Lafcadio Hearn*. Macmillan, 1961.
池田雅之『ラフカディオ・ハーンの日本』角川学芸出版，2009 年.
梅本順子『浦島コンプレックス —— ラフカディオ・ハーンの交友と文学』南雲堂，2000 年.
小泉節子「思い出の記」『小泉八雲 —— 思い出の記・父八雲を憶う』恒文社，1991 年．pp. 3 -51.
小泉凡監修『小泉八雲，開かれた精神〈オープン・マインド〉の軌跡。』小泉八雲記念館，2016 年.
仙北谷晃一「ラフカディオ・ハーンと浦島傳説 ——『夏の日の夢』の幻」『比較文學研究』第 30 号（1976 年）：pp. 41-68.
土居光知『神話・伝説の研究』岩波書店，1973 年.
西成彦，鶴岡真弓「ケルトの西，シンシナティの南 —— クレオールするペイガニスト」『ケルトの魂 —— アイルランドから日本へ』平凡社，2019 年．pp. 197-238.
西成彦『耳の悦楽 —— ラフカディオ・ハーンと女たち』紀伊国屋書店，2004 年.
林昌平『浦島伝説の研究』おうふう，2001 年.
平川祐弘『ラフカディオ・ハーン —— 植民地化・キリスト教化・文明開化』ミネルヴァ書房，2004 年.
牧野陽子『〈時〉をつなぐ言葉 —— ラフカディオ・ハーンの再話文学』新曜社，2011 年.
————.『ラフカディオ・ハーン：異文化体験の果てに』中央公論社，1992 年.
三舟隆之『浦島太郎の日本史』吉川弘文館，2009 年.
森三樹三郎訳『荘子』Ⅰ，中央公論，2001 年.